様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　２４　年　５　月　２５　日現在

機関番号：３２６０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520277
研究課題名（和文）　英米アイルランドの現代詩劇・演劇における古典ギリシア劇・神話の現代化の総合的研究
研究課題名（英文）　The Study of Modern and Contemporary British, Irish, and American Adaptations of the Ancient Greek Theatre and Myths

研究代表者
堀　真理子　（HORI MARIKO）
青山学院大学・経済学部・教授
研究者番号：50190228

研究成果の概要（和文）：テロや戦争、災害や貧困、環境汚染といった現代の我々が世界で抱える問題を過去一世紀にわたって現代アイルランド、アメリカ、イギリスの詩人、劇作家、アーティストがどのように取り組み、それぞれの作品を通してどんな知と癒しを提供してきたかを考えるうえで、とくに古典ギリシア劇・神話に人間の知の原点を求めて作られたものに焦点を絞り、具体的にどのように古典が翻訳・翻案・脚色されてきたのか、その社会的役割や美学的意義を考察した。

研究成果の概要（英文）：This project explored how modern and contemporary British, Irish, and American poets, dramatists, and artists have dealt with issues such as terrorism, war, calamities, poverty, and environment problems we living in this global age face in their works, focusing on their translations and adaptations of the ancient Greek theatre and myths and examining their social, political, and aesthetical meanings.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
21 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
22 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
23 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学
キーワード：英米文学

１．研究開始当初の背景

(1)　本研究は、堀真理子を代表とする青山学院大学に所属する研究者（佐藤亨、外岡尚美、伊達直之）４名から成り、いずれも現代英米アイルランド詩・演劇・文化を専門としている。古典ギリシア劇･神話を 20 世紀から 21 世紀にかけての過去一世紀に活躍する現代の詩人や劇作家が脚色・翻案している背景を個々の作品に照らして考察するだけでなく、包括的に研究する目的で、平成 18 年度から６年間、2 期にわたる科学研究費補助金のもと、共同研究を行なった。

(2)　本研究に携わった４名の研究者は、それぞれが研究してきた詩人や劇作家が、①古典ギリシア劇や神話に深い関心を示し、その翻訳・翻案による劇・詩劇を書いていること、②古典ギリシア劇がそうであったように、20

世紀から 21 世紀にかけて移り変わる社会状況を敏感に感じとって、社会的･政治的･文化的な批評として作品を再構築していること、③古典ギリシア劇の重要な構成要素である舞踊やコロスを取り入れ、言語と身体との緊張関係のなかで美学的な効用を見いだそうとしていること、などの共通項があることから、アイルランド、イギリス、アメリカの現代詩人や劇作家たちがいつ、なぜ、どのように古典ギリシア劇や神話を翻訳･翻案によって現代化しているか、そこから浮かびあがる社会的・政治的・思想的・美学的・文学的・演劇的意義は何なのかを明らかにするために、共同研究を行なった。

２．研究の目的

(1)　テロ、戦争、災害、貧困、環境問題といった今日の世界が抱えるさまざまな問題に対峙し、それらを古典ギリシア劇・神話に照らして、古典時代の叡智を現代に蘇らせ、現代に生かし、ときには換骨奪胎して書き換えることによって現代を生きる我々に問題提起をしている現代の詩人や劇作家の作品を取りあげる。

(2)　このことは必然的に、社会的弱者への強い共感を根底に、現代社会の権力関係を照射する作家や作品を扱うことになる。そうした社会的・政治的な意図をもって書かれた作品を取りあげることによって、現代に生きる我々が抱える問題の所在を明らかにし、権力の布置が芸術を通していかに組み替えられるか、芸術の可能性や意義について考察する。

(3)　古典ギリシア劇・神話を継承あるいは再構築するという意図の根底には、古典が完成度の高い芸術のモデルであるという意識が働いている。そこには儀式性や様式性といった演劇的・美学的関心がある。古典を題材・素材にしながら新たな様式性を探求することによって作られた現代の作品は、新たな詩の形式や舞踏の可能性を切り開く大きな力になることは間違いない。その点を具体的に明らかにする必要がある。

(4)　古典ギリシア劇・神話に批評的ものさしを見いだす現代思想家や哲学者は数多い。古典的な知を現代に読み替える作業を行なっているのは詩や演劇だけではない。したがって、そうした思想や哲学に照らして現代の詩劇･演劇を考える作業は、社会的･政治的・文化的意義を見いだすうえで重要である。

３．研究の方法

(1)　アイルランド、イギリス、　アメリカの詩劇、演劇、パフォーマンスにおいて、古典であるギリシア悲劇・神話を翻訳・翻案・脚色し古典の様式性や儀式性に新たな意義を見いだし、古典に照らして現代解釈が試みられている作品を中心に、とくに 4 名の研究者それぞれが関心のある分野に限定し、作品の背景となる社会や文化、思想や哲学、文学的動向、他の芸術との関わりなどについて各人が調査研究を行なうことにした。

(2)　アイルランド･イギリス・アメリカの文学研究を専門とする研究者の視点からだけではわからないことも多い。そこで、他分野の研究者や実践に携わる演劇の専門家の話を聴く機会を設け、アドバイスをしていただくことにした。平成 21 年度には、神話学の第一人者でギリシア神話にも詳しい吉田敦彦学習院大学名誉教授に、『ピロクテテス』を中心にその神話的背景お呼びソポクレスの劇作術、教育劇としての効果についてお話を伺った。また、ギリシア劇の翻案劇を執筆し、翻案劇集を編纂している南カリフォルニア大学演劇学部教授で劇作家のヴェリナ･ハス･ヒューストン氏には、沖縄戦および沖縄米軍基地問題を扱った『アンティゴネ』翻案の構想について話をしていただいた。平成 22 年度には、エウリピデスの『トロイアの女たち』を演出した文学座の演出家、松本祐子氏から、日本でこの作品を上演する意義と新しい解釈の可能性についての話をしていただき、英米アイルランドで上演する意義と比較考察する機会を得た。平成 23 年度は、フランスのバロック演劇を実践しているマチルド・エチエンヌ氏の講演会を主催した。バロック演劇にはギリシア劇の翻案作品も多く、社会のキリスト教信仰の表現形式とのあいだに相関関係があり、日本の能における神道的神の表現とも似通っているという指摘を通して、神話を現代化する劇作品の美学的、社会的意義を考察する一つの糸口が見えてきた。

(3)　最近では翻訳・翻案を理論化する研究が一つの学問分野とも言えるほど活発な議論を行なうほど盛況であるが、とくに翻案や脚色の理論は本プロジェクトにも役に立つ。これまで翻案の問題を考えてきた本プロジェクトの代表の堀は、日本の劇作家、別役実がカフカや S.ベケットの作品の翻案をしてきたことに着目し、翻案が文化とともに、また時代とともに変化しなければならない、そうでなければ後の世に受け継がれることはできない点をあらためて確認した。ゆえに、古典ギリシア劇や神話もかたちを変えながら、少しずつ変容しながらも今日まで受け継がれてきたのである。

(4)　以上のように、プロジェクトの最終目標である、古典ギリシア劇・神話を現代化する意義を広く社会的現象、政治的状況、文化的背景、美学的発展の歴史、哲学的･思想的理論などとからめて考察するという大きな視点による理論構築をめざし、共同研究を進めてきた。その間、4 名がそれぞれに外部の研究会や海外での調査研究を行ない、そのプロジェクトの成果を交換した。以下、各人がどのように研究を進めてきたか、その方法を簡単にまとめることにする。

　堀は主として現代アイルランド、イギリス、アメリカの女性劇作家による古典ギリシア劇・神話の翻案作品を通して、今日の父権的

社会に対して投げかけるフェミニスト的視点、社会的弱者への共感の姿勢について考察すべく、学会発表と調査研究を行なった。とくに平成 22 年度にはフルブライト研究員として 3 ヶ月間、カリフォルニア大学サンディエゴ校の古典ギリシア劇の世界的な学者であり翻訳家で翻案劇も手がけているマリアン･マクドナルド教授のもとで本プロジェクトを推進していくうえでの多くの助言と教示をいただいた。また、その間、ヴェリナ･ハス･ヒューストン教授はじめ、ギリシア劇を積極的に翻案・脚色しているアメリカの女性劇作家にインタビューをしたり未出版の作品を提供してもらったりした。また、平成 23 年度には大阪大学で開催された FIRT/IFTR（国際演劇学会）の年次大会でヒューストン教授を含むセッションを企画・口頭発表を行なった。また、これとは別に、今日ギリシア劇を演じるときの身体的負荷の大きさがサミュエル･ベケットの作品に求められている俳優の身体的負担に相当する点に着目し、演劇的・美学的な比較研究を行なった。

佐藤はアイルランド、とくに北アイルランドの社会と文化、歴史との関連でギリシア神話の翻案や翻訳を研究した。なかでも、ソポクレス作『アンティゴネ』の翻訳・翻案を北アイルランドの〈現在〉を映す同時代作品としてとらえた。取り上げたのはシェイマス・ヒーニーの『テーベの埋葬』(2004 年）とトム・ポーリンの『騒擾取締法』(1984 年）であり、二つを 1960 年代後半以降の北アイルランド紛争との関係から検証し、詩人たちの関心事を探った。前者は和平プロセスを大きく前進させた 1998 年のベルファスト合意後に、一方、後者はまさに紛争の渦中に書かれ、それぞれ紛争と和平プロセスという時代背景を持つ。政治的進展が進み、時代が変わる一方で、北アイルランド社会の構造、たとえば、プロテスタント系住民とカトリック系住民がそれぞれのコミュニティを形成するという分断社会の特徴はあまり変わっていない。当地はテロの応酬こそないが、依然、対立があり、火種を抱えている。そこで北アイルランド社会の変化と現状を、ミューラルという両コミュニティに見られる政治的メッセージを持つ壁絵を通して調査し、その成果を単著『北アイルランドとミューラル』として発表した。最後の年の 2011 年度は本務校からベルファストでの在外研究の機会を与えられ、ミューラルの実地調査を継続するだけでなく、「インターフェイス」という両宗派が接する境界地域の問題について研究を開始した。

外岡は現代アメリカ演劇とパフォーマンスにおけるギリシア悲劇の神話的物語と形式を通した、社会的トラウマの表象および時事的出来事への批判的介入の可能性を考察すべく、学会発表および調査研究を行った。ニューヨーク・パブリック・ライブラリーでのアーカイヴ調査を中心に、病（AIDS）とトラウマおよび現代演劇・パフォーマンスについて、またパフォーマンスが構成し得るシチズンシップについて研究を行った。神話的枠組みのなかで人種・ジェンダー・階級関係の諸問題が重層的に言及され得る点に着目し、23 年度には日本英文学会関東支部、アメリカ文学会東京支部においてテネシー・ウィリアムズに焦点を合わせて発表を行った。

伊達は、20 世紀初頭のアイルランドの独立運動期に、ケルトの文芸復興として文化的ナショナリズムの形成を担うことから開始されたアイルランド現代演劇について、これがケルト的テーマに反して、表現言語としてはゲール語ではなく、支配者の言語である英語で書かれたことに着目し、特にその中心で活動した W.B.イェイツの詩劇の実験と、それが持つ今日的な可能性について以下の研究を、さらに現代のコンテンポラリー・ダンスにも引き継がれるものとの視点を加えて行った。イェイツのギリシア劇の翻案作業と付随する資料から、イェイツは舞台を通して、複数の価値観をもつ人々の間に共同意識を形成させる普遍的な力の範を、ギリシア古典劇にも求め、コロスの象徴機能などの様式的可能性を探ったことが分かった。特に韻文化された劇のパフォーマンスによって、言語の集合的な音楽性と舞踏性とを前景化し、言葉をさらに深く身体化させ、ここに舞台と観客とをつなぐ新たな集合的な象徴体験の場の創出を試みたと考えられる点は、ダンスとの深い関連性を強く示唆する。実際に、言語と身体との関係、そして舞台上の身体同士のコミュニケーション的関係を強く意識させるイェイツのこうした実験は、現在国際化を進めるモダンやコンテンポラリーのダンス活動の一部に、例えばウィリアム・フォーサイスにおける、前景化された自身の身体と他者の身体との「コンタクト」が創る共同の存在の場に対する問題意識などと、深く呼応していると考えられる。以上の調査研究を、ミンストレルの要素のあるイェイツのバラッドや、美術館における公的なエクフラシスの実践と関連づけ、オベロン会などで口頭発表をした。

４．研究成果

(1)　平成 23 年の 3 月 11 日、東北の大地震と津波は日本の社会に大きな衝撃をもたらし、その復興は福島の原子力発電所のダメージに伴い、前代未聞の大騒動となった。第二次世界大戦を知る人々にとっては戦争直後の記憶が蘇り、戦争による被害とも比較される出来事となった。2001 年 9 月 11 日の同時多発テロの衝撃と比べて、3･11 と称されてもいる。自然災害は戦争やテロによる爆破事件とは異なるものの、何も罪のない市民が犠牲になり、命を奪われるという理不尽さ、原爆の被災国である日本が原子力発電を推進した結果、起こるべくして起こった原発問題は、人間の力の限界とその驕りを再考させるものだった。

本プロジェクトは英米アイルランドで活躍した 20～21 世紀の詩人や劇作家に焦点を当てて、古典ギリシア劇や神話がどのように現代化され、作品として結実しているかを広く社会的・政治的・文化的背景、演劇・文学・美学的視点、思想的･哲学的理論との関わり

のなかで分析・考察するために立ち上げた共同研究であったが、3･11 の体験は私たちの研究を机上の理論ではなく、自分たちの問題として強く受け止めさせられる出来事だった。

したがって、それ以前は欧米の英語圏文学をグローバルな視点で考察するということが、いわば「ヒューマニスティック」な他者への共感から自分たちの問題として受けとめようとしていたのに対し、芸術作品に書かれた洞察と知をローカルな視点で、他人事ではすまされない脅威を「実感」として受け止めることになった。

イギリスの国際政治学者 Jenny Edkins はその著書 *Trauma and the Memory of Politics* において、国家や国連の人道的な介入が権力と支配というグローバルな構造を堅固にするために使われ、ほんとうに戦争で被災した人々（これは津波で、原発事故で住む場所、働く場所を失った方々に置き換えることもできるだろう）の声は届かず、「犠牲者」としてのイメージだけが先行してしまう点を指摘している。こうした被災者を疎外する構造がある限り、その声（これを Edkins は哲学者アガンベンの言語論を使って、論理的な言語領域の外に位置するもの、と捉えている）は永久にすくいあげられることがない。それをすくいあげるのが芸術作品で、とくに詩劇や演劇が担える役割は大きい。古典ギリシア劇や神話に描かれた、神々が支配する世界での人間の脆弱さや、戦争の犠牲となって苦しむ人々の姿に、現代の戦争や災害の犠牲となった被災者たちのあり様を重ねて、翻案・脚色を試みる作家が多く存在するのは紛れもない事実である。

(2)　第一次世界大戦や第二次世界大戦といった戦争時、戦争による犠牲者が軍隊にとどまらず、弱者である市民にもおよび、しかもナチスドイツの国家的な殺戮のような言語道断な抑圧がまかりとおっていた。そうした社会の動きを敏感に感じとり、強く抵抗する作家がいるいっぽうで、そうした社会に虚しさを覚え、筆を折る作家もあれば、逆に権力の側に立つ者も出てくる。古典ギリシア劇や神話が戦争の被災者を描きながらも、それを宿命と受けとめ、戦争を遂行する国家を規定事実として社会の秩序維持に貢献していた、つまり市民国家ギリシア、すなわち父権制社会を保持する役割を芸術が担っていたという側面は否定できない。したがって、体制批判の立場にたつ今日の作家や芸術家は古典ギリシア劇や神話を用いつつも、その体制的視点を壊しながら新たな「神話」を構築していると言ってよい。とくに今日の女性作家は、父権制社会に挑戦するべく作品を創っている。その意味では翻案・脚色の段階で古典を「転覆」していると言える。

(3)　戦争は、昨今のアメリカによるアラブ社会への介入も含めて、強国が弱国を支配し、自分たちの価値観のもとに被支配国を秩序だてようとするものとして、正当化されてきた。そうした強国への抵抗が民族闘争や植民地の独立運動の発端になってきた歴史がこの一世紀のアジアやアフリカ、中南米の各地で見られるが、西ヨーロッパでもイギリスとアイルランドのあいだでその闘争が繰り広げられ、今日なお北アイルランドは火種を抱えていると言える。20 世紀はアイルランドにとって内戦とテロの繰り返しの歴史だと言ってよい。イギリスの植民に対する抵抗がアイルランド独特の文化や社会を形成してきたとも言え、詩や演劇といった芸術は国民的な抵抗の文学として機能してきた。

その抵抗の文学として 20 世紀初頭に生まれたのがアイルランド文芸復興と呼ばれる運動で、W.B.イェイツがその主唱者だったことは言うまでもない。イェイツは古典ギリシア劇や神話を援用してアイルランドの土着の伝統を芸術的高みに押し上げることに成功した。特定の文化に固有な主題を、複数の文化的な背景を持つオーディエンスに伝える試みを通して、とくに 20 世紀初頭の欧米のモダニズム文学運動におよぼした影響、舞踊の発展に貢献した数々の舞台実験は目を見張るものがある。伊達はイェイツの舞踏にも着目し、その美学的側面とコミュニケーション的側面について考察、コンテンポラリー・ダンスへとつながる要素をイェイツの舞踏に見いだした。

しかしアイルランド出身とはいえ、先祖がイギリスから植民にやってきた支配者層の血をひくイェイツは、カトリック信仰と教義を国の政治に反映させた独立後のアイルランド共和国には違和感を覚えたようだ。イェイツより若い世代はなおさらで、独立期にはかなりのプロテスタント系市民が他のヨーロッパやアメリカに移民していった。サミュエル･ベケットもそんな一人である。戦争中にレジスタンス活動に身を投じたベケットはナチス秘密警察から身を隠していたが、そうした経験が戦後の劇作家人生を構築した。古典ギリシアの神話に匹敵するだけの作品を書こうとしたベケットの作品に翻案・脚色はないが、神話に求められていた人間の恐怖と不安の表出、そしてそれを演じることの身体的苦しみは美学的な意味での共通項が垣間見られる。

神話への傾倒はイギリスの支配が長かっただけにアイルランドの文化に深く根づいている点でもある。アイルランド伝承の神話と古典ギリシアの神話は植民の歴史と重ねあわされたかたちで、今日の詩人や劇作家の題材としてしばしば登場する。マリアン・マクドナルドがその著書や論文で強調しているように、今日のアイルランドの主要な劇作家たちはこぞって古典ギリシア劇や神話を自分本たちの歴史になぞらえて翻訳・翻案している。ことに北アイルランドでは、植民地主義という視点に立てば、いまだにイギリス統治下にあるため、それはより政治性をもったかたちで書かれることが多い。そんな歴史的･社会的･政治的背景を壁絵（ミューラル）とからめて、佐藤は詩・演劇のもつ政治的メッセージと比較対照した。

(4)　アメリカ合衆国は国内での内戦は19世紀半ばの南北戦争を除いてはなく、本国が戦場となった経験をしていない。しかしながら、ヨーロッパ、アジア、アフリカ、中南米、アラブ地域に戦争や政情不安があると、多くの兵士を送ってきた。表向きは他国の独裁や圧政から市民を解放するという正義感にあふれた行動であるが、内実はもう少し複雑で問題があることは、2005年にノーベル文学賞を受賞したイギリスの劇作家ハロルド・ピンターの受賞記念講演のアメリカ批判を見ても明らかである。強国アメリカは国内の弱者に対してもさまざまな抑圧を強いてきた。ネイティブ・アメリカンの強制移住から奴隷制、領土拡張運動のなかでの人種差別や移民制限など、国家の保持のために弱者を抑圧してきた。人種的、民族的、性的マイノリティから貧困層にいたるまで多くの差別が存在する背景には民族･人種別にパイを分けるという政治経済システムも一役買っている。その分配制度がなくならない限り、人種・民族差別や格差の是正はむずかしい。人種的に混じりあっている人はそうした壁をどのようにうち破るか闘っており､最近ではMixed Blood Studies も盛んだ。堀は、多人種を自認し、こうした研究に大きな貢献をしている劇作家ヴェリナ・ハス・ヒューストンやシェリ・モラガの活動を取り上げ、その作品をとおして古典ギリシア劇や神話を翻案・脚色する政治的･文化的意義を考察した。

今日アメリカが抱える問題をやはり古典ギリシア劇や神話を通して語る試みは他にもある。外岡はジョン・ジェスランやテネシー・ウィリアムズの作品をとりあげ、それぞれの作品が病（AIDS)、人種・ジェンダー・階級・セクシュアリティにかかわる社会的トラウマを、古典悲劇や神話の物語形式を変換することによって表象していることを考察した。強度の感情的負荷を伴う現代的・時事的問題は、古典的悲劇や神話の物語形式を通すことによって、振幅の激しい感情と同時にブレヒト的な批判的距離をもって描くことが可能になる。その両極の表現によって現代の状況に批判的介入が可能となることに、古典ギリシア劇や神話を翻案・脚色する意義があることを見いだした。

(5)　以上のように、4名の共同研究者はそれぞれが得意とする分野から調査・研究を行ない、古典ギリシア劇・神話の現代化という共通のテーマで互いの研究について発表・討論を行なった。本研究を行なっているあいだにもイラクやアフガンでの戦争やテロ活動やシリアの紛争などが絶え間なく続き、新聞でその犠牲者について報道されない日はない。混沌とした世界情況のなかで、反戦争を訴える作品が世界中のあちらこちらで上演されている。それを受けてか、あるいは3・11の衝撃がもたらした影響か、昨今のわが国の演劇界も戦争をテーマにした作品の上演に余念がない。イギリスでは 2010 年には、テーベ伝説を今日のアメリカとおぼしき大国とアフリカの国と思われる発展途上国の対立に置き換えた斬新な翻案劇 *Welcome to Thebes* がナショナル・シアターで上演された。作者はMoira Buffiniという女性劇作家である。神話でオイディプスのあと、テーベを治めるのはクレオンだが、この翻案劇ではクレオンの妻エウリディケである。神話ではほとんど言葉も発していない女性に光を当てて神話を書き直すという作業を今日の女性劇作家は好んで行なう。アメリカで今注目されている劇作家の一人Sarah Ruhlは *Eurydice* という作品で、もう一人のエウリディケ、すなわち黄泉の国から彼女をこの世に戻そうとするオルフェウスの妻の神話を現代ふうにエウリディケの内面に迫って彼女の目から神話を書き直している。カナダの大学で教えている演出家のPeggy Shannonは2012年7月にギリシアのイドラ島で「戦争と女性」という国際シンポジウムを企画、ヴェリナ･ハス･ヒューストン、イギリスを代表するギリシア劇の翻案作家 Timberlake Wertenbaker、カナダを代表する女性劇作家 Judith Thompsonの3名によるギリシア劇の翻案作品を演出・上演を予定している。劇芸術を通して世界に反戦を訴えると同時に、分野横断的研究者による反戦理論の構築をめざしている。こうした世界的研究の動向に対し、本プロジェクトが日本からの発信者として研究に貢献できればと願っている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）
(1)　堀真理子　"Shaping a New Communal Identity: Transnational Feminist Theatre of Velina Hasu Houston"　*Comparative Theater Review* Vol. 11. No.1(2012) 52-64. 査読無。
(2)　堀真理子　"The Transformation of Kafka in Contemporary Japanese Theater" *Journal of The Kafka Society of America* 33rd-34th year(2011) 80-89.査読有。
(3)　佐藤亨「北アイルランドのインターフェイス――ピース・ウォールの現状」『青山経営論集』第46巻別冊１（2011）32-46頁、査読無。
(4)　伊達直之(書評批評)「*Ezra Pound: Poet――A Portrait of the Man and His Work I: The Young Genius 1885-1920*」*Ezra Pound Review* 13号（2011）77-84頁。査読無。
(5)　佐藤亨「変貌するミューラル――北アイルランド和平進展の中で」『青山経営論集』第45巻別冊１(2010) 39-54頁、査読無。
(6) 外岡尚美「『自由』を求めて――アメリカ、グローバル化、演劇的想像力」『神奈川大学評論　特集　世界同時代の文学』62巻(2009) 65-75 頁。査読無。
(7) 佐藤亨「東北へ、東北から」ヴェガ　２巻(2009) 34－47頁、査読無。
(8)　佐藤亨「ボードレール・パリ・エリオット――『遊歩者〈フラヌール〉』の系譜」*T.S.Eliot Review*

20 巻（2009）63－77 頁、査読有。

〔学会発表〕（計　9 件）
(1)　伊達直之「W.B. Yeats の“Municipal Gallery Revisited”と後期バラッドに込められた歴史、政治と公共性」オベロン会。2012 年 1 月 28 日（国際文化会館）
(2)　外岡尚美　「愛、売買、人種――ウィリアムズにおける置換の構造」日本アメリカ文学会東京支部例会。2011 年 12 月 10 日（慶應義塾大学）
(3)　外岡尚美　「代理（置換）の構造――『地獄のオルフェウス』」日本英文学会関東支部例会。2011 年 4 月 30 日（成蹊大学）
(4)　堀真理子　"Shaping a New Communal Identity: A Theatrical Innovation of Velina Hasu Houston" FIRT/IFTR（国際演劇学会）年次大会ベケット・ワーキング・グループ。2011 年 8 月 10 日（大阪大学）
(5)　堀真理子　"Struggling with a Dead Language: Language of Others in *All That Fall*" FIRT/IFTR（国際演劇学会）年次大会ベケット・ワーキング・グループ。2010 年 7 月 25 日（ミュンヘン）
(6)　伊達直之「W.B. Yeats の後期の Ballad 作品：Roger Casement と Charles Stuart Parnell の記憶を歌う意味」オベロン会。2009 年 6 月 27 日（国際文化会館）
(7)　外岡尚美「ノスタルジアの活用――*The King and I* から *Anna and the King* まで」日本アメリカ文学会東京支部例会。2009 年 12 月 12 日（慶應義塾大学）
(8)　佐藤亨「シェイマス・ヒーニーの想像力――『テーベの埋葬』を中心に」アイリッシュ・アメリカン研究会。2009 年 12 月 20 日（国士舘大学）
(9)　堀真理子「現代を映す鏡としての古典ギリシア悲劇――その変容と更新」日本アメリカ文学会全国大会。2009 年 10 月 10 日（秋田大学）

〔図書〕（計 5 件）
(1)　佐藤亨（共訳）『アイルランド文学小史』（北山克彦との共訳）国文社(2012) 総頁数 408 頁。
(2)　外岡尚美（共著）『アメリカ＜都市＞の文化学』ミネルヴァ書房(2011)「ニューヨークのパフォーマンス空間――タイムズ・スクエア、ディズニー、パフォーマティヴ・シチズンシップ」(95-120 頁)
(3)　佐藤亨（共著）「ダグラス・ダン、根無し草のコスモポリタン――スコットランド現代詩人の詩と思想」、『スコットランド文学その流れと本質』（木村正俊編）開会文社出版（2011）558－578 頁。
(4)　佐藤亨（単著）『北アイルランドとミューラル』水声社（2011）総頁数 136 頁。
(5)　佐藤亨（共編著）『モダンにしてアンチモダン――Ｔ．Ｓ．エリオットの肖像』研究社(2010)「エリオットとヨーロッパ――荒地からの出発」(255－272 頁)

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）
○取得状況（計 0 件）
〔その他〕
該当なし

６．研究組織
(1)研究代表者
　堀　真理子（HORI　MARIKO）
　青山学院大学・経済学部・教授
　研究者番号：５０１９０２２８
(2)研究分担者
　佐藤　亨（SATO　TORU）
　青山学院大学・経営学部・教授
　研究者番号：４０２４５３３７
　外岡　尚美（TONOOKA　NAOMI）
　青山学院大学・文学部英米文学科・教授
　研究者番号：１０２２７６０５
　伊達　直之（DATE　NAOYUKI）
　青山学院大学・文学部英米文学科・教授
　研究者番号：３０３１６８８０